

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



若山八十氏《風》1975(昭和50)孔版、紙

版画をめぐる「謄写版の冒険」

謄写版の登場と普及

1894(明治27)年、堀井新治郎父子が開発した簡易印刷器は「謄写版」と名付けられた。謄写版は製版に鉛筆を使うため、細かな文字や複雑な図もよく再現した。またインクは油性で耐光性があり、先に普及していたこんにゃく版などの複写器よりも多くの部数を刷ることができた。謄写版は、1888(明治21)年に山内不二門が開発した毛筆謄写版とともに、文書事務の多い官庁や、商社、学校、軍隊などを中心に普及していった。

謄写版は、じつに単純な仕組みでできている。まず、丈夫で薄い和紙である雁皮紙にパラフィンロウをひいた版材「ロウ原紙」をやすりの上に置き、鉛筆を使って孔をあけ、ローラーでインクを通す。孔の点が集まれば線になり、面になる。印刷器械も木枠を台にちょうどいいで止めればよく、動力に電気もいらない。潔いまでに単純であることは、謄写版に、それを使う人が印刷の全てを自分の手で行い、全てを自分の表現とすることができるという可能性をもたらした。使う人の感覚と技能次第で美しいものを生みだしうること、それが謄写版の大きな魅力であった。

謄写版が、身近な印刷術として親しまれるようになったのは、1918(大正7)年創業の東京の佐藤兄弟商会をはじめ、昭和謄写堂、大阪の吉田三光堂など個人層を顧客にした業者が現れてからである。これらの業者によって器材の開発や広報誌の発行、技術指導、印刷引受など、個人に向けたきめ細やかな働きかけがなされ、謄写版が個人に普及して、技術の研究が始まった。同人誌を発行するために謄写版を始めた文学青年や、生活のために製版を請け負っていた人のなかから、従来の簡易印刷としての謄写版という枠を越え、手技による製版・印刷に適した字体や、図版製版法の研究を進める技術者が現れたのである。そして、大正時代末には技術書の刊行が始まり、1930(昭和5)年に宮川良が創立した謄写印刷の研究所、日本謄写芸術院の『謄写研究』をはじめとする出版物や講習会を通じて、それぞれの技術者が開発してきた製版、印刷技術が公開されていった。

謄写版の道具のいろいろ



印刷術と版画技法のあいだで

そのなかで、謄写版による版画も生まれようとしていた。関東では、1933(昭和8)年に日本謄写芸術院の指導者でもあった芥川清巳が、『謄写研究』誌上で「謄写印刷に依る創作版画の出生は吾々の久しく待望する処」と述べたことが知られている。芥川の言葉によれば「機械として扱ふには余りにも原始的な、又原始的であることを存在の最も誇らかな特徴とするこの簡潔極まる謄写版」であることが、「其の成果をして使駆者の精神的閃きに従ひ限りなき伸長性を蔵しやる」のである¹。芥川は、人が機械の限界に従うのではなく、人に器械の能力を引き出す余地のある点が、ほかの印刷術ない謄写版の独自性であり、この点が個人による技術の開発だけでなく、美術作品の制作にも適していると考えていた。

関西では、1932(昭和7)年にはすでに、小泉與吉が謄写版による創作版画を提唱していた。小泉は定規を使って読みやすいゴシック体の文字を書く「パイロット製版」を完成させた技術者として知られているが、大阪で盛んだったポスター・やちらしなどの商業印刷が発展して版画芸術となることを期待していた。1932(昭和7)年7月、小泉は編集を手がけた『謄写版界』創刊号で、謄写版は「昭和の版画藝術²」であるとして「創作版画出よ!³」と呼びかけ、その後1937(昭和12)年に自身で創刊した『謄写版』誌上でも繰り返し創作版画の制作を読者に勧めている。

この頃の関西の謄写版による商業印刷の例として、滋賀県彦根市で1930(昭和5)年にサンライズスタジオを開いた岩根豊秀の仕事がある。日本謄写芸術院の講習会に学び、小泉の『謄写版界』の愛読者でもあった岩根が制作したポスターなどは、デザイナー自身が版を作り、印刷することで魅力を増している。このような印刷物が、小泉に商業印刷から創作版画への飛躍を期待させたのだろうと思われる。「自ら立案し自ら刷る!この快味こそ実に何物にも換へ難い尊いものだ⁴」という岩根自身の言葉にあるように、小規模な謄写印刷所では、デザイン・レイアウトから、文字製版、絵画製版、印刷もひとりで行うところが多く、製作

過程に創造の喜びがあったことも、美術作品としての版画に通じると感じられただろう。

謄写版と創作版画

そして、小泉や芥川の提唱から10年の後、若山八十氏が1942(昭和17)年の第11回日本版画協会展に謄写版による作品を出品した。これが、謄写版による創作版画の始まりとされている。もちろんこの間にも、展覧会へは出品されないまでも、さまざまな試みがあった。たとえば小泉自身の絵画製版は「版画」とみなされ、1933(昭和8)年に刊行された島屋政一『印刷文明史』第五巻でも「孔版版画」として紹介されていた。ここに取り上げられた図版は、『謄写版界』掲載の口絵で、画家が描いた原画をもとに小泉が製版したものであり、創作版画家たちが提唱していた「自画・自刻・自摺」ではない。しかし、和紙を版とする謄写版独自の表現力を引き出していて、読者を謄写版による版画制作に誘う充分な魅力を持っている。このような小泉の試みに導かれて、自らの作品を謄写版独自の表現によって制作し、美術にまで高めることは、技術者たち共通の目標となっていました。

和歌山市で謄写印刷所「蝸牛工房」を営む傍ら、制作を続けた孔版画家、清水武次郎も小泉の謄写版による版画制作の試みから刺激を受けた一人だった。清水と謄写版との出会いは、1935(昭和10)年に師範学校を卒業して赴任した小学校で、この学校に勤めていた奥山勇の手ほどきを受け、謄写版で児童文集を作ったことであった。奥山は小泉の指導を受けた一人で、絵画製版を得意としており、清水は奥山を通じて小泉と知り合った。

清水の謄写版画制作の試みは、カット集を作ることから始まった。小さな画面であっても、ひとつひとつの図案が清水の創作である。そして、1947(昭和22)年1月、清水が発行していた『とうしゃ文化』に、ようやく「創作版画」が登場した。謄写版に出会って版画を制作するまでに、10年あまりが経っていた。版画技法として認められていた木版などとは異なり、現役の印刷術であった謄写版を用いる場合は、その印刷物を、版画とする要素はなにかと制作のなかで考える必要があったのだろう。



小泉與吉『謄写版』1、2、3 1935(昭和10) 謄写版、紙



岩根豊秀『金龜食堂ポスター』 1932(昭和7) 謄写版、紙



清水武次郎『とうしゃ文化』8 1947(昭和22) 謄写版、紙

清水は、同時に日本版画協会などの美術展覧会への出品も始めた。1947(昭和22)年前田藤四郎、吉原治良、そして関西の謄写技術者とも交流があった川西英らによって創立された汎美術家協会第1回展に出品した《少年》は、その最初期の作例である。かつての教え子を描いたスケッチをもとに制作されたこの作品は、小品であり、技術的にも巧みとはいえないが、柔らかく深く、版画として魅力的である。その魅力は、謄写版の線は点の連なりであるために銅版画の線の強さに劣る、点の集まりである面は木版画の面の明快さに達しないと指摘されつづけてきた謄写版の弱点を、個性として受け入れているところから発している。

版画技法としての謄写版

戦前から謄写版で創作版画を制作していく若山八十氏に続いて、1947(昭和22)年の第15回日本版画協会展に清水武次郎の作品《慈光》が入選して以来、戦前から商業美術の分野で注目を集めていた岩根豊秀、のちに木版画家として活躍する星襄一など各地の謄写技術者たちが出品をはじめ、1950年代には10名前後が入選するようになっていた。しづしづ開かれた謄写印刷業界主催の展覧会も、謄写版画の発表の機会となつた。

しかし、1960(昭和35)年頃を境に、日本版画協会展への謄写版に起源をもつ孔版画の出品者は減少していった。謄写版から創作版画の世界へ入っていった人の一部は、木版画など他の版種を手がけるようになり、多くは仕事に追われて作品制作から離れた。そして1964(昭和39)年、第4回東京国際版画ビエンナーレ展にニューヨークから発表の《足跡》

が出品されてからは、シルクスクリーンが孔版を代表する技法として、刺激的なポップアートの紹介と並行して普及していった。

印刷術としても、1960年代以降、コピー機、ワードプロセッサー、パソコンコンピューターが普及するにつれ、謄写版は使われなくなってしまった。1963(昭和38)年の中小企業近代促進法に応じて、印刷所の機械化が進んだことが大きく影響し、1980年代以降は需要の乏しくなった謄写版印刷器、原紙などの生産が中止され、手に入れることも難しくなった。それでも謄写版に触れて孔版を深く知った人にとって、道具を手作りし、新たな資材を試し、手法を工夫して制作を展開させていくことは可能であり、それがその人独自の表現につながることを愉しんでもいた。さらに新たに謄写版を自身の表現手段とするデザイナーや作家も現れた。

代用印刷、簡易印刷としての謄写版という劣等感を持たない世代が、もっともよく自分を表現しうる世界を謄写版に見いだすことによって、謄写版は木版のように生き続けるだろうと謄写技術者たちは期待していたが、その思いは、数の上ではささやかではあっても現実になっている⁵。すでに活版や石版、オフセット印刷のかわりとしての役割を終えた謄写版の、本来の性質が見直されようとしているのだろう。謄写版独特の性質が、かつて克服すべきとされた弱点を含めて他と替えがたいものとして受け入れられ、素材と技法が表現と密接に結びついた成果をあげている。いま、あるいは将来謄写版に触れる人のなかからも、この印刷術にあらたな生命を吹き込む仕事が生まれだされる可能性は充分にある。(植野比佐見)

¹ 「謄写版の独自性」『謄写研究』25号 1933(昭和8)年1月

² 「巻頭言」『謄写版界』1、1932(昭和7)年7月

³ 「倒写鏡」『謄写版界』4、1932(昭和7)年12月

⁴ 「商業印刷物に対する謄写版の応用範囲に就て」『謄写研究』13号、1932(昭和7)年1月

⁵ 「新春放談会『孔版OBの会会報』17、1973(昭和48)年9月、草間京平「孔版では」『印刷』34-7、1951(昭和26)年7月ほか

「謄写版の冒險 卓上印刷器からはじまったアート」は、2013年2月9日～3月24日にかけて開催されました。



清水武次郎《少年》1947(昭和22) 謄写版、紙



岩根豊秀《ひなげし》1951(昭和26) 謄写版、紙



星襄一《あぢさい》1951(昭和26) 謄写版、紙



「日本エッチング」の想い出

「コレクション展 2012/13-冬」に並んだ銅版画の、モノクロームやセピア調に染まる小画面に閉じ込められた薄暗い日本情調に沈んでいると、30年ほど前のいろいろな記憶が甦ってきました。兵庫県西宮市の美術館に勤めていた頃のことです。コレクションに恵まれない美術館でしたから、作品を全国から借用してつぎからつぎへと企画展を開き、息つく暇もないほどでした。そんな時、市内在住の高名な建築家についての情報が届けられました。その人は、若い頃ロンドンに留学して建築だけでなくエッチングを学び、功成した後は能楽や茶の湯に親しんで、手捻り茶碗なども素晴らしい。とにかく大変な趣味人であり、お元気なうちに作品を貰って置けばどうかとの提案でした。

昔も今も、美術館活動をつづけていると外部から様々な寄贈話をいただきます。善意に基づく申し出とはいえ、美術館が優れた美術作品だけを収集展示することで、もって市県民の「感性」^{かんよう}涵養に資し、あるいは生涯学習意欲に応えるという使命を果たす機関である以上、何でも受ける訳にはいきません。せっかくの善意ながら謝絶せざるを得ない場合がほとんどです。今度もそんなところだろうと高を括っていましたが、いただいた関係資料を見て、並々ならぬ人であることがわかつてきました。

長谷部鉄吉とともに住友ビルを設計し、日建設計の母体となる建築事務所を創業した竹腰健造さんは、数寄屋風の自邸に九十歳を超えてなお矍鑠と余生を送っておられました。金沢生まれで本姓岩村、日本における美術批評・美術史の草分けである岩村透はその長兄にあたります。縁あって竹腰家に入り、東京帝国大学で建築を学びました。卒業後は長兄の勧めでロンドンに留学して建築士の資格を得る一方、F.エマニュエルから学んだエッチングも、ロイヤルアカデミーに入選するまでになります。帰国後は住友に入社して建築設計に腕をふるい、また寺崎武男とともに数少ない銅版画家として、1918(大正7)年の日本創作

版画協会創立に参加したのです。そんな昔語りを拝聴しながら、「余技」の陶芸作品は遠慮申し上げ、銅版画十点余をありがたく頂戴してきましたが、今となっては陶芸作品も一緒に良かったかな、と少々悔やまれる気もします。

未だ「版画ブーム」冷めやらぬ頃でしたから、日本創作版画の大半を占める木版画家や「現代版画家」についてはよく知られ、展覧会もたびたび開かれていました。しかし、こと銅版画に関しては、司馬江漢、亜欧堂田善といった江戸の銅版画と、戦後の浜田知明、駒井哲郎らをつなぐ間の部分は、在外の長谷川潔や浜口陽三を例外として、極端にいえば何一つ知られていませんでした。新収蔵の竹腰作品を紹介しつつ、この日本銅版画史の空白領域を埋める企画ができるいかと考え、1982(昭和57)年の春に開催したのが「日本近代銅版画展」です。竹腰さんの告別式に列してから半年あまりが経っていました。当時は参考資料が皆無に等しく、京都国立近代美術館にあった『エッチング』誌をコピーさせていただき(その後復刻されました)、その記事にはほとんど頼りきりで何とか展覧会にまとめることができました。『エッチング』誌に図版掲載され名を記される未知の作家をもとめ、わずかな伝手をたどって少しずつ…、というよりは「糸の結び目」を探し当てるに、一気に多くの作品が手繰り寄せられます。すなわち、キーパースンともいるべき人々で、多くの版画仲間とネットワークをもち、しかも創作版画界に特有の「作品交換」という美風の賜として、そこにはおびただしい作品が集積されていたのです。高名な関野準一郎さんのはか、版画家としては世間からほとんど忘れられていた田坂乾、松下芳太郎、高羽敏といった方々にも随分とお世話になりましたが、みな故人となってしまいました。

会期中、生没年不詳と紹介した作家が健在であるとか、もろもろの新しい情報が寄せられ、知見が徐々に更新・蓄積されてゆきました。同年秋には東京都美術館で



笠木實《のぶ》1940(昭和15)

「日本銅版画史」展も開かれ、ようやく近代銅版画が収集、展示両面で美術館の扱う対象領域となったのです。笠木實さんの作品も『エッチング』誌にたびたび登場していましたが、ネットワークの氣まぐれで私の投げた糸にはかからなかったのです。宿題のひとつだった訳ですが、その笠木實さんの銅版画に勤務先の美術館で出会うという「奇遇」には驚きました。30年の時を隔てて記憶も薄れかけていた尋ね人が、思わず身近にいたようなものです。2010(平成22)年の秋に当館で開催した「日本近代の青春 創作版画の名品」が宇都宮美術館に巡回した折、隣県群馬の出身で東京にご健在のご本人から担当の井上芳子学芸員に声がかかり、銅版画作品の一括寄贈が実現したのでした。

西田武雄が『エッチング』を創刊し、日本エッチング研究所を興して講習会を全国で開くなど、普及活動に身を挺したのは、ちょうど日中戦争が抜き差しならぬ深みへと歩みを早め、日米開戦から敗戦へと至る時期に重なります。そこで銅版画を学んだ笠木さんたちの作品に、何か説明しようのない暗さを感じるのは、諧調表現を重んじるエッチングの技法的特色ばかりでなく、時代の暗雲が影を落とすからではないでしょうか。加えて、白く抜くべき版面からインクを完全に拭いとることをせず、グレー調に摺り上げる西田流のやり方も影響しているでしょう。しかしこの暗鬱な灰色の世界には、戦後版画の華々しい開花を人知れず準備する種子も埋もれていたのだ、と改めて感じさせられたことでした。(熊田 司)

戸外で美術 — 和歌山大学教育学部附属中学校によるインスタレーション授業

和歌山大学教育学部附属中学校では、3年前からアート・プロジェクトとして、学校外に広がるインスタレーションに取り組んでいます。近代美術館と博物館の敷地を使って、一週間作品の展示を行うというものです。3年生の後半になって実施しますので、卒業制作の趣もあるようです。

一昨年は奥山部分にテープを張りめぐらせて、その場所の空気の動きを見るものにする。2年目は自分たちの形を段ボールで切り抜き、色を塗ったり何かを貼り付けたりして自分を表現したものを、壁一面に貼っていくというものでした。残念ながら昨年は初日に警報が出るほどの暴風雨となり、一週間公開の予定が1日で片付けなければならないことになりましたが、3年生になつたらこのように取り組むのだという意識が、1、2年生にも生まれているようです。

今年度、私たちや学校にとっては3回目ですが、生徒諸君にとっては初めての取り組みになります。そのためもあって毎年、ゴミを出したり樹木を傷めたり、あるいは危険が無いようにという条件がなかなか

守れないという問題もありますが、内容面でも連携を深めて少しでも良いものとしたいと考え、地元のNPOにも協力をしていたので、授業の計画から関わりを持ちました。

和歌山市のNPO 和歌山芸術文化支援協会(wacss)では、田辺市中辺路町近露に芸術家を招き、現地に滞在して制作をしてもらう活動を行っています。一昨年の夏は、写真家の佐藤時啓さんがカメラ・オブスキュラになっているツリーハウスを制作しました。今年はそのツリーハウスを、佐藤さんが別の形の作品に再生させました。リヤカーに積まれたカメラ《リヤカーメラ》です。これは、乗り込んで動きながら映像を体験するという装置のような作品です。佐藤さんと wacss は近露や田辺市のいくつかの学校で、この《リヤカーメラ》を使ったワークショップを開催しました。附属中学校でも佐藤さんの制作について学び、《ツリーハウスカメラ》や《リヤカーメラ》を参考にしながらインスタレーションを計画しました。

グループごとにアイディアをまとめ、計画を共有して実際に制作する作業は、時間の

制約もあり、かなり困難なものでした。

また、佐藤さんによるワークショップもできるだけ早い時期に実施したかったのですが、日程の調整が難しく、実際に制作を始めてからの開催となりました。それでも生徒諸君は強く印象づけられた様子で、事前に学習していたこともあり、カメラ・オブスキュラを制作したグループもいくつかありました。更に、カメラから発想を展開させて、周囲の音を集めて聞くとか、空の一部分を切り取って眺めるといった内容の作品も見られました。

昨年の作品が風雨に弱かったことから、今年は随分頑丈な構造を持った作品の制作が目標になったようですが、そうすると材料や工具の扱いが大変になり、制作の難度は随分高かったと思われます。

佐藤さんは、中学校の校舎に登る階段の横に掲げられた「豊かな心 やりぬく力」という標語に注目し、これがあつたら何でもできると、感心されていました。インスタレーションの制作はまさに、この目標に近づくための課題となるでしょう。

(奥村泰彦)



今年のインスタレーション



《リヤカーメラ》と佐藤時啓さん



ワークショップで話をする佐藤時啓さん



昨年のインスタレーションの様子



うち 当館の《聖女》が笑わせるから



パウル・クレー
『内なる光の聖女』
1919(大正8)
リトグラフ

当館所蔵



ベルン美術館展示作
E.W.K., Bern 藏

当館が所蔵するパウル・クレー作品の一つに、『内なる光の聖女』というリトグラフがあります。最近では前々回の特集展示「幻想の美術」にも並んでいましたが、目にするとたびに、タイトルと作品から受ける印象にギャップを感じていました。「聖女」といいながら胸を顕わにしていますし（キリスト教の聖人が裸体で描かれるのは、殉教者として傷を負っている姿を表すときです）、むしろその表情はなんだか滑稽です。前を通りつい目を留めてしまいますが、じっと見ていると思わず笑ってしまいそうにさえなるのです。

これと同じ作品を、先日スイスのベルン美術館で開かれていた「イッテンとクレー 色彩の宇宙」¹⁾展で目にすることになりました。版画の場合、同じ作品に出会うことは少なからずありますが、今回は見た瞬間に「あれ？」と感じたのです。館に帰って所蔵作品を確かめてみましたが、やはり何かが違います。当館のクレーの方が、ほんの少し、面白おかしい顔をしています。

どこが違うのだろうかと、図版と見比べながら辿ってみると、まず肌の色が違いますし、輪郭線も少しずれています。そしてただでさえ「へ」の字口になった口角は、さ

らに四角く強調されており、額にかかる前髪部分には、まるでカッパのお皿のような輪郭まであります。これはどうやら手で描き足したものようです。というのも当館のクレーは試し刷りのひとつなのですが、今のところ筆者が調べた限りでは、別ステートの試し刷りに描き足しません。

一方、ベルンで目にしたのは完成作の方で、バウハウスが出版した全5巻の版画集『新ヨーロッパ版画』の中からの1点です。バウハウスとは、1919年にドイツのヴァイマルに設立された造形芸術学校で、当時の前衛的な芸術家を教員として集めており、クレーもその一人として1921年から1931年まで活動します。クレー着任の年に始まったシリーズ第1巻は、バウハウスの教員7人を特集して全110セット作られています²⁾。

さてこれら完成作も、当館の試し刷りも、程度の差はある「聖女」らしいとはお世辞にも言えないでしょう。もしクレーが意図的に神聖化しないで描いたのだとしたら、その理由の一つは、今回ベルンの展覧会と一緒に並べられていたヨハネス・イッテンとの関係にあるかもしれません。

20世紀初頭のドイツでは、造形の法則を世界や宇宙の仕組みと重ね合わせようとしていた向きが少なからずありましたが、それを神秘主義的に理解する傾向が強かったのがイッテンでした。彼も1919年から1923年までバウハウスで教鞭を執っていましたが、日本の禅思想なども取り入れながら、芸術活動のみならず生活の全てを教義化してゆくような態度は、1921年頃からますます高まり、場合によっては新興宗教がかつて受けとめられていました。そういう背景に加えて、特定の宗教にとらわれなかつたクレーの立場を考えれば、見方によっては胡散臭い雰囲気もあったイッテンらに対する、クレーの冷ややかな視線が、《聖女》に込められていたようにも感じられます。

とはいって、クレーが宗教性を示唆する人物像を描いたのはこの時だけではなく、以降も時折、聖人や預言者といったモチーフは登場します。これまでの研究では、神と人間、此岸と彼岸、あるいは過去と未来や不安と希望など、対極するもの間に属する存在として解されてきましたが、それらと《聖女》を見比べていると、一つの共通点に気がつきます。それは、目を開けているのか閉じているのかよくわからないように、もしくは半開きの状態で描かれていることで、まるで仏教で言う半眼のようなのです。そう考えると、筒のような腕や、衣のような胸元の曲線、光背にも見える頭部の円形など、そこかしこに仏像のような雰囲気を



『日本の佛教彫刻』 1919掲載図版より

漂わせています。もしや、と思い調べてみると、クレーはバウハウスに加わる直前の誕生日に、妻から『日本の佛教彫刻』³⁾という書籍をプレゼントされていることがわかりました。それは当時民族資料に位置づけられていた日本の佛教彫刻を、ヨーロッパの古代彫刻にも匹敵する造形として、美術史的な視線で取り扱った最初の研究成果でした。当時のヨーロッパで日本美術に対する関心といえば、浮世絵や書画にとどまっていましたから、この研究が芸術家たちの視野を広げたとも言えます。この中にはおよそ8世紀までの仏像の図版が、200ページ以上にわたって前後左右のアングルで載せられており、クレーが《聖女》の参考にしたのではないかと思われるものもいくつか見受けられるのです。

《聖女》に限らずクレーの造形は、「子どものように無邪氣で自由な」と形容されます。それは、目に見えるままの現象的な姿ではなく、形を作りだすエネルギーや、もしかするとなり得たかもしれない別の姿を具現化するという試みの結果でした。そのため、西洋とは異なる日本の造形観や宗教観、なかでも具体的な姿となって現されている聖なるものの姿が、クレーに直接的なインスピレーションを与えたとしても不思議ではありません。当館の《聖女》にある加筆も、日本美術の線的な表現を念頭に、試行錯誤していたときのものかもしれませんし、少なくともクレーがこの本を実際に手にしていたという事実は、クレーの造形について、より多方面から考え直すきっかけを与えてくれます。展示室の《聖女》が、ちょっとおかしな表情で筆者を呼び止めていたのは、このことを伝えるためだったのだなと、今は思います。

（青木加苗）

¹⁾ ITTEN-KLEE.KOSMOS FARBE/Kunstmuseum Bern (会期: 2012年11月30日-2013年4月1日)

²⁾ 2~5巻は当時の前衛的な芸術家をフランス、ドイツ、イタリアとロシア、そして再度ドイツ、と国別に特集する予定でしたが、残念ながら2巻のフランス編は経済状況の混乱もあり、未完成に終わってしまいます。

³⁾ Karl With, *Buddhistische Plastik in Japan*, 1919, Kunstverlag A. Schroll, Wien.

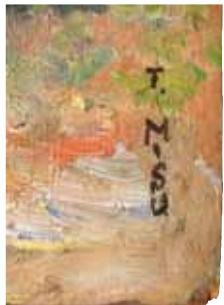
三栖敏雄《絵を描く伊作》(1912)について

2002年、当館にて「西村伊作の世界 芸術を生活として」展を開催しました。和歌山県新宮市出身の西村伊作(にしむら・いさく /1884-1963)は、大正期を代表する文化人のひとりで、芸術と生活とを調和させた新しい生活のスタイルを時代に先駆けて実践したことで知られています。建築、絵画、陶芸、料理など多岐にわたる分野を自ら手がけ、さらに私財を投じて東京駿河台に文化学院を創設するなど、教育の場でも活躍した彼の功績を、この展覧会では紹介しました。

新宮市には、伊作自身が設計し、1914(大正3)年に完成した自邸が現存しております。現在は西村記念館として公開されています。同館には、伊作が手がけた絵画や陶芸、家具など多く残されており、展覧会に出品したのですが、伊作の旧蔵品のなかに「T. MISU」と署名のある油彩画がありました(図1)。画面には、野外でイーゼルを立てて、絵を描く人物の後ろ姿が印象派風のタッチで描かれています。白いシャツに白いズボン、そしてハット。洒落た姿は、如何にも伊作らしさ



図1
三栖敏雄
《絵を描く伊作》
1912(明治45)年
油彩、板
32.9×23.1cm
西村記念館蔵
※画面右下に「T. MISU」
の署名



く、パレットを右手に持ち、左手で絵を描いていることから判断しても、左利きのこの人物は伊作だと考えてよいでしょう。しかし「T. MISU」という絵の作者についてははっきりせず、展覧会には作者不詳のまま《絵を描く伊作》というタイトルで出品されました¹。

三栖敏雄(みす・としお /1892-1964)。おそらく作者は、『郷土の美術家 明治・大正・昭和の物故作家』(和歌山県立美術館、1968年)30頁に記載がある、この人物ではないかと想像はするものの、いろいろなことがわかり始めたのは、その後ご遺族の方より連絡をいただいてからのことでした。四男の萬喜夫氏からの情報をもとに、三栖敏雄の略歴を辿ってみます。

三栖敏雄は、1892(明治25)年、和歌山県東牟婁郡三尾川村(現在の古座川町)の生まれ。1906(明治39)年3月に、東牟婁郡高池尋常高等小学校を卒業すると、和歌山県立新宮中学校に入学します。1911(明治44)年3月に卒業、上京し白馬会洋画研究所に学び、翌1912(明治45)年4月に東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。1914(大正3)年4月には本科へ進学し、1918(大正7)年3月、同校を卒業しています。中山太陽堂などで働いた後、1923(大正12)年の関東大震災を契機に帰郷し、田辺市内の小中学校に勤務。1937(昭和12)年には、満州の大連第2中学校に転職するも、終戦によって帰国。田辺市内の中学校で教師を続け、制作も行いましたが、1964(昭和39)年に逝去しています。

「明治四五年四月二十八日隅田川の朝鐘ヶ淵紡績の側の渡場」

この作品には、裏面(図2)に書き込みがあり、描かれた日付や場所まで知ることができます。1912(明治45)年は、三栖が東京美術学校予備科西洋画科志望に入学した年。4月28日ということは、学校に通い出したばかりの頃です。鐘ヶ淵紡績は、後のカネボウで、当時、東京都墨田区に工場がありました。その側を流れる隅田川の渡場で、学生の三栖と伊作が何故に朝から居合わせ、スケッチをしていったのでしょうか。

2人の接点があったのは、三栖の新宮中学校時代(1906.4~1911.3)ではないかと想像されます。三尾川村から新宮に

出て、寄宿舎生活をしていた三栖が、新宮中学の同年だが2つ先輩にあたる佐藤春夫がそうであったように、大石誠之助や沖野岩三郎ら、先進的な文化人が活躍する当時の新宮の空気を吸うなかで、伊作に出会っていたとしても不思議ではありません。当時から絵が好きで描いていたという三栖は、あるいは町中で伊作がイーゼルを立てて絵を描く姿を見ていたかもしれません。その後、絵を志し、親の反対を押し切って上京した三栖が、偶然か必然か、東京にて伊作と再会したという物語も可能性としてあるのではないかでしょうか。もっとも、1912(明治45)年の伊作の動向は、3月にシンガポールから帰国して、沖野岩三郎とともに新宮教会に幼稚園を始めたということ以外は不詳で、何をしていたのかよくわかっていないし²、なぜこの場所でスケッチをしていたのかといった疑問も日々残るのですが。

萬喜夫氏によると、満州から引き揚げる際に、三栖は初期作品のほとんどを失ってしまったといいますし、三栖から伊作に贈られ、伊作が所蔵することで、この作品が今まで残ったことは幸運でもあったでしょう。

最後に、三栖萬喜夫氏、そして調査協力いただきました西村記念館に感謝申し上げます。

(奥村一郎)

¹ 「西村伊作の世界 芸術を生活として」展カタログ 122頁に図版掲載。出品番号 I-159。

² 同カタログ年譜を参照。



図2
作品裏面「明治四五年四月二十八日隅田川の朝 鐘ヶ淵紡績の側の渡場」と書かれている。

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）休館／月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

日本の絵画の50年

4.20(土)～6.16(日)



湯川雅紀《福耳》2011

この50年間、日本における絵画制作は、ヨーロッパやアメリカでの動向に反応しながら、多様な展開を見せてきました。20世紀後半以降に日本で生み出された絵画作品を、時代を追って見直す展覧会です。

コレクション展 2013-春

特集 版画・図案・オブジェ

—5.19(日)



大家利夫
《書物の容姿》
1999
(柄澤齊装画)

なつかしの美術館3

「美術の時間」

7.6(土)～8.25(日)



佐藤時啓

Gleaning Lightシリーズより《The Bridge》2005

学校はお休みでも、美術館では「美術の時間」が開講です。シリーズ3年目の今回は、タイトル通り「時間」がテーマ。作品の中にさまざまな時間のかたちを探します。

コレクション展 2013-夏

特集展示 坂九：紙の上の仕事

6.8(土)～9.1(日)



坂九
《旅人》
1957

生誕120年記念 石垣栄太郎

9.3(火)～10.20(日)



石垣栄太郎
《街》
1925

和歌山県太地町に生まれ、出稼ぎ移民としてアメリカに渡り、1920年代から40年代にかけてニューヨークを中心に活躍した石垣栄太郎(1893-1958)の生誕120年を記念し、その足跡を紹介します。

コレクション展 2013-秋

特集展示 没後100年 香山小鳥

9.14(土)～12.1(日)



香山小鳥
《愁》
1913

その他

第67回和歌山県美術展覧会

I 10.30(水)～11.3(日) II 11.6(水)～11.10(日)

和歌山県文化表彰の歩み展 創立50周年記念

11.23(土)～12.8(日)

物質と美術

12.17(火)～2014.2.11(火・祝)



小清水漸
《花・赤い》
1986

美術作品を構成する物質は、ただ作品の素材であるだけではありません。作品がそうあるために必要な理由もあります。物質という側面から作品について考える展覧会です。

コレクション展 2013/14-冬

特集展示 人間と宇宙のドラマ：

吹田文明・堀井英男・長岡國人

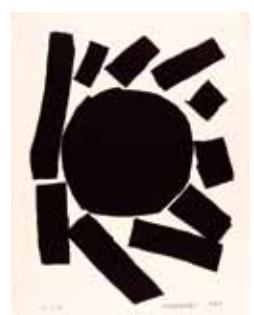
12.17(火)～2014.2.23(日)



長岡國人
《ISEKI/PY XXVI》
1981

版画について考える

2014.2.18(火)～3.30(日)



村井正誠
《黒い太陽》
1962

『大阪朝日新聞』に特集「版画展覧会」が掲載されて100年、作り手の「自画・自刻・自摺」により、版画を近代的な美術作品と位置づけようとした創作版画、現代版画の問題を考えます。

コレクション展 2014-春

特集展示 モノクロームの世界

2014.3.1(土)～

メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



1. 展覧会の無料観覧（同伴者1名まで）

2. 展覧会レセプションへのご招待

3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布

4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引

5. 各種行事への参加

（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）

6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円

学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当：松原

